

# 白蘭の野望

✕椿✕

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

白蘭が世界の支配者になるために様々な考えを巡らせた結果、ある考えに至り、ある女体化したキャラを調教し、自分のものにする物語です。

あるキャラは先天性女体化で、小学5年からスタート、白蘭はヤング白蘭で、DSです。

調教の順番としては

- ①あるキャラ
- ②笹川京子
- ③三浦ハル
- ④クローム髑髏
- ⑤ユニ

です。

順番は前後するかもしれませんが。

投稿は二週間ごとに投稿する予定です。

気分によつては早く投稿されるかも知れません。

6月7日、『洗脳しようか』の冒頭に京子とハルの容姿の描写を追加しました。

# 目次

始めようか (乳首責め)	1
堕ちようか (調教)	9
洗脳しようか (洗脳)	23
依存させようか その1 (乳首責め)	33

## 始めようか (乳首責め)

「勝てない。どうして綱吉君に勝てないんだ」

白蘭はそう呟いた。

彼の能力である、平行世界にいる全ての自分の知識と思惟を共有する力。

その力でみる平行世界は全て、ボンゴレのボスである沢田綱吉に負ける姿ばかりだ。

白蘭は考えた。

どうすれば勝てるか。

平行世界の知識で得た転生の力で何度もトライしても勝てない。

もつと早く生まれて、力をつけて挑んでも勝てない。

暗殺しようとしても必ず失敗する。

「どうすればいい」

白蘭は考える。

世界の頂点に経つ過程を。

それは綱吉に勝つ、もしくは排除することだ。

しかし、勝つことはできない。

それは実証済みだ。

では排除は？

まだ暗殺しか試していない。

白蘭は考える。

誘拐はどうだ。

そう考えた白蘭は実行に移す。

結果は失敗。

なぜ失敗したか考える。

「そういうことか」

様々な検証の結果、綱吉に危害を加えようとするとは必ず失敗するところが分かり、綱吉の肩をぼんと触れることは何者の邪魔が入ることはなかった。

白蘭は考える。

危害を加えず、綱吉を排除する方法を。

「そういえば……」

白蘭は綱吉の性別が女性になっていた世界があることを思い出した。

確率は低いが今まで200程の転生を繰り返す中で5回程あったのだ。

「そうだ」

籠絡すればいい。

女性である綱吉を調教し、自身の虜にしてしまえばいい。

そう考えた白蘭は転生を繰り返す度に女性を上手く扱えるように技術を身に付け始めた。

最高の調教師から調教の技術、媚薬の調合方法、調教器具の作り方など、平行世界から知識を集め、技術を高めていった。

そして……。

「初めまして、綱奈（つな）ちゃん」

「お兄さん……誰？」

「僕かい。僕は白蘭」

白蘭は計画を実行に移した。

今、白蘭の目の前にいるのは性別が女の沢田綱吉。

女性の場合の名前は綱奈（つな）と言い、現在小学5年生。

顔は将来美しくなると言えるほど整っており、蜂蜜色の瞳とその雰囲気からは優しさが感じられる。

栗色の髪は所々ツンツンとしていて、肩程まで届く長さがあり、太陽の光が反射すると美しく映える。

身長は140cm程で、身体の発育は年相応だ。

彼女がリボンと会うのは中学二年の時であり、この頃から調教しなければ間に合わず、完全に依存させるには時をかけ、快楽に漬け込んでいくしかないのだ。

「僕は君のことが好きなんだ。君はどうだい？」

白蘭はそう言って、綱奈の目の前に手をかざす。

すると、綱奈の瞳からは意識が抜け、虚ろ瞳になる。

「私も好きです」

感情のない声でそう言う綱奈。

「それは嬉しいね。さあ、僕の家遊びに行こう」

「はい。白蘭様」

「うくん。白蘭って呼び捨てにしてほしいな。敬語も使わなくていいよ」

「分かった。白蘭」

白蘭から差し出された手を綱奈は迷いなく掴み、白蘭の家に向かっていく。

白蘭はこの日のために、平行世界の知識を使い、資金を貯め、家を購入していた。

家はただの一軒家に見えるが、完璧な防音がされており、地下室には調教室がある。

「さあ、着いた」

「お邪魔します」

白蘭は綱奈を家にいれ、地下に連れていき、催眠を解いた。

地下室は壁、床、天井までもが白かった。

ガラス張りの棚が三つほどあり、棚には様々な大きさのバイブやどう使うか想像できない道具、液体が入った小瓶などが陳列されていた。

また、ベットもあり、高級そうな見た目をしている。

「……ここはどこ？」

「ここは僕の家だよ」

正気に戻った綱奈は周りを見渡し、首を傾げている。

「どうして白蘭は私をここに連れてきたの？」

催眠は解いたが綱奈が名前を覚えているように、催眠中の白蘭との繋がりは消えてはいなかった。

「君を気持ちよくするためさ」

「気持ちよく？」

「うん。そうだよ。気持ちいいことは幸せになることなんだよ」

「幸せ。なりたい……でも、母さんが心配するよ」

綱奈は心配する母の姿を思いだし、白蘭にそう言った。

「大丈夫だよ。今日はすぐ終わるよ」

「本当？」

「約束するよ」

「分かった」

白蘭は綱奈を納得させ、早速調教に移った。

まずは調教する前に様々な箇所を開発しなければならぬ。

ましてや相手は子供だ。

しつかり性感帯を開発しなければ、痛がり警戒してしまう。

警戒されてしまえば最後、二度と綱奈には近づけないだろう。

催眠も万能ではなく、あまりにも警戒されると効果はない。

「まずはこれを飲んで」

白蘭はまず綱奈に小瓶に入った媚薬を与えた。

濃度は薄いため効果は低いが、この年齢だと確実に発情する。

綱奈は迷いなく、媚薬を飲み干した。

「どう？綱奈ちゃん」

「身体がポカポカする」

「効果が出た証拠だよ。上着を脱ごうか」

「うん。・・・ん、しょ」

綱奈が上着を脱ぎ終わると、彼女の可愛らしい上半身があらわになる。

胸はまだ小学5年生であるので、ほんの少し膨らんでいるくらいだ。

乳首は小さく、可愛らしいピンク色で、いやらしきの欠片もない。

肌は染みひとつない真珠のような白さである。

成長すれば確実に美しい体になるだろう。

「綺麗だね。将来はもっと綺麗になるよ」

「ありがとー」

次に白蘭は新たな媚薬の小瓶を用意し、筆を柵から取りだし、先端を小瓶に浸す。

「これを乳首に塗り込むからね。少し冷たいよ」

「乳首ってなに？」

「ん？ああ。乳首ってのはね、これのことだよ」

「ひゃっ！」

白蘭は媚薬が染み込んだ筆で綱奈の右乳輪をクルクルとなぞり、媚薬を塗っていく。

「おっぱいのこれ？」

「うん。そうだよ」

会話に最中に左の乳輪にも媚薬を塗っていき、ふくつと綱奈の乳首に息をかける。

「ひゅみゅく。すーすーする」

最後に乳首に媚薬を塗っていく。

「いい感じだね」

白蘭はそう言つて、手にイボイボが付いた手袋を着けた。

「いくよ、綱奈ちゃん」

白蘭は人差し指で乳首を下から支え、親指を使い、上から軽くきゅつと綱奈の乳首を人差し指と親指で挟み、摘まんだ。

「ひゃああああっ！」

綱奈は初めて乳首を弄られたのにも関わらず、乳首で感じていた。

これが媚薬の効果である、性感の活性化だ。

「感じたみたいだね。どんな感じ？綱奈ちゃん」

「おっぱいからふわ〜って頭に何かが来て、ぴりぴりする」

「それが気持ちいいってことだよ」

「これが気持ちいい？」

「そうだよ。ほら、もつといくよ」

次は軽くクリクリと乳首を弄りだす白蘭。

「ひゃ、ひゃあつ、ひゅむつ、ひつ、んにゃあああ」

「ふふつ、気持ちいいかい？綱奈ちゃん」

「んにつ、これがつ、きもち、いいつ。ああ、きもちっ、いいよつ、ひくつ、でもつ、にゃんか、オシッコがつ、パンツ濡れちゃうっ」

「それはオシッコじゃないよ。愛液って言つてね、気持ちよくなるとおまんこから出ちゃうんだ」



「愛液？おまんこ？」

「そう、気持ちよくなると出てくる液体のこと。それからお股のことだよ。これからはおまんこって言うんだ。分かったかい、綱奈ちゃん」

「うんっ、ひんっ、はあ、はあっ、白蘭の言う通りにする」

「でも、他の人の前では言っってはいけないよ。もちろんお母さんの前でも」

「分かつ、はひっ、た」

「いい子だ」

そう言った瞬間、白蘭はぎゅぐゅと乳首を摘まんだ。

「んにやあああああっ！！」

綱奈は体を軽くビクビクと震えさせた。

どうやら綱奈は人生初めてのアクメを迎えたらしい。

「今の感じはどうだった？」

「頭、真っ白になって、気持ち・・・良かった」

「その感じはイク、もしくはアクメって言うんだよ」

「イク？アクメ？どっち使ったらいいの」

「どっちでもいいよ。でも、イク時やアクメする時はちゃんと宣言するんだよ」

「分かった」

「じゃあ、もう一回やってみようか」

「うん」

そして白蘭は再び、綱奈の乳首を弄り始める。

クリクリと横に揉み込んだり、コリコリと縦に揉み込んだり、ギョツギョツと摘まんだりして、綱奈の乳首を刺激し、乳首特有の甘い快楽を生み出す。

「ひやああ、んんっ、にやああ、んみゆ、んにいいっ、あっ、あんっ、あっ」

綱奈の声には艶やかさが出始め、息づかいも荒くなっていき、乳首は小学生の物とは思えないほどビンビンに勃起し、とてもいやらしく見える。

「びやく、らんっ、んああっ、ぎゅゅっって、してっ、んくうっ、おねがいつ」

「もうイキそうなのかい？」

「う、ん。もう、イキ、そうっ。イクっ、イカせてっ！」

「いいよ。さあ、イって」

白蘭はぎゅゅっって綱奈の乳首を摘まみ、グリグリと乳首を転がす。

「んにやあっっ！イクっ、白蘭っ、私っ、イクっ、ひにやああああああっっ!!」

綱奈は乳首から来る一際大きい快楽に体をビクリと跳ねさせ、乳首アクメを迎え、綱奈のマンコからはトロトロと愛液が垂れ出していた。

「んはあっ、きもち、いいよお。もってしてえっ、白蘭っ」

「今日はここまでだよ」

「何でえ、もっとしてよお」

「もう帰らないとお母さんが心配するよ」

「うう、でも」

「また明日来てもいいから」

「ほんとっ！」

「本当だよ」

「分かった。帰る」

「いい子だね、綱奈ちゃん」

白蘭は綱奈の頭を優しく撫でる。

「あっ、パンツどうしよう。怒られちゃうかも」

綱奈のパンツはマンコから溢れ出た愛液でグシヨグシヨに濡れているのだ。

「はい、替えのパンツ」

綱奈のパンツは白の何処にでも売っていそうなパンツで、白蘭はこの日のために買っていったのだ。

「わく、ありがとう白蘭」

「また明日迎えに行くからね。今日のことは誰にも言っちゃいけないよ。誰かに言ったらもう僕は来ないからね」

「うん。分かった」

「よし。じゃあ、近くまで送ってあげるよ」

綱奈は白蘭に連れられ、白蘭の家を出て、家の近くまで送ってもらい、白蘭と別れた。

綱奈は帰路の中、今日のことを振り返っていた。

(気持ちよかったなあ。明日も気持ちよくしてもらおう)

そして、白蘭の顔も思い出す。

(白蘭、カッコよかったなあ。キラキラしてて。私のお婿さんになってくれるかな)

白蘭は綱奈に自身への好意を催眠で植え付けていた。

とは言っても、白蘭は種を植えたにすぎない。

育てるのは綱奈であり、水を与えるのは白蘭だ。

綱奈を惚れさせる。

これも白蘭の作戦である。

「お帰り、綱奈。友達と遊んでたの?」

家に帰ると、母親である奈々がそう質問してきた。

「うん。面白かった」

「そう。それは良かったわね」

こうして、綱奈の調教は始まった。

白蘭は確かな一歩を踏み出したのだ。

## 堕ちようか (調教)

それから白蘭は2週間かけて綱奈の乳首を開発し、乳首はもう媚薬を使わずとも感じるようになっていた。

さらに2週間の間に淫語も教え、今日は最後のクリトリスの開発が行われる。

「いらつしやい、綱奈ちゃん」

「お邪魔します」

流石に2週間も通うと道を覚えてしまい、綱奈は一人で来るようになった。

「どう？白蘭、可愛い？」

綱奈はクルリとその場で一回転をした。

ワンピースのスカート部分がふわりと舞い、にこりと白蘭に微笑みかける。

「可愛いよ」

「えへへ」

二人は話ながら地下へ向かっていった。

地下へ着くと、白蘭は準備を始める。

乳首を開発したときと同様に媚薬の小瓶と筆、イボイボの手袋を用意する。

さらに、小さいローター、クリトリス専用のシリコン製の吸引器を用意する。

白蘭が準備している間に綱奈はワンピースとパンツを脱ぎ、生まれのままの姿になった。

この地下室は冬でも調教できるように空調が完璧で、綱奈が体調を崩すことはない。

「今日からクリトリスの開発をするよ」

「うん。ここだよね」

綱奈は皮に隠れた、自身の小さく可愛いクリトリスを指差す。

「そうだよ。」

やることは乳首を開発した時と同じだ。

媚薬を塗り、指で刺激してアクメさせる。

「んくうううう！」

ビクンつと乳首の時よりも大きく身体を震えさせ、アクメを迎えた。

「次はこれだよ」

白蘭は手袋を外し、小さいローターを手に取った。

「なにこれ？」

「使ってみれば分かるよ。いくよ」

ローターのスイッチを入れると静かにぶいいいいいんという音がローターから聞こえ始める。

白蘭はゆっくりと綱奈のクリトリスに近づけていき、ちよんと少しだけ当てる。

「ふわああっ！ビックリしたっ」

「どう？気持ちいいでしょ」

「うん。ゾワゾワが一瞬で来た」

「少しずつ慣れていこうね」

そう言って白蘭はローターを当てる時間を増やしていく。

「はああっ、ふわっ、ひにゃあっ、はんっ、はっ、はあ、んはあっ、ふわああああっ！」

「うん。いい感じだね。」

指で弄ったお陰かローターの刺激も気持ちいいらしく、悦に入っている。

一分程で白蘭はローターを止め、吸引器を手を取った。

「次はこれだよ」

白蘭は吸引器の空気を抜き、先端をクリトリスに入れ、手を離す。

キュポツという音を立て、クリトリスが強く引っ張られる感覚を綱奈は感じた。

「どうだい？綱奈ちゃん」

「うくん。少し痛いかな」

「だよね。でも、こうするとどうかな？」

クリトリスを吸引している道具を引っ張る。

ポツという音が出て、クリトリスが解放される。  
そしてまた、吸引される。

これを何度も繰り返していると、綱奈は少しずつ感じ始めていた。  
「んっ、んん、んあっ、んん、少しずつ気持ちよくなってきた」  
「あと少しかな」

そう言って白蘭は少しずつスピードを早くしていく。

「んああっ、ああっ、あっ、ああっ、はあっ、んっ、あああっ」  
「よし、ここまでかな」

白蘭はクリトリスの吸引を止めた。

「な・・・何で止めるの？もう少しで・・・イけそうだったのに」  
「もうちよつとしたら分かるよ。さあ、次だ。ベットに行こう」

綱奈の背中を押し、白蘭は綱奈にベッドにいくように促す。  
そして、綱奈がベッドの側に行くと、ある指示をする。

「ベッドの中央の上に横になって。そうそう。そうしてら足を立てて  
広げて、おまんこが見えるよう大きくね。M字に開くんだ」

綱奈は言う通りに、恥ずかしげもなく足を開くと、ぴっちり閉じ  
られていたマンコが少しだけ開かれる。

「ちよつと待ってね」

棚から媚薬クリームを取りだし、それを人差し指と中指に塗り、綱  
奈の元へ行く。

「ゆっくり入れるからね」

「うん」

白蘭は横になっている綱奈の正面に膝立ちで座り、ゆっくりと慎重  
に綱奈のマンコに人差し指を入れていく。

「んっ、んん」

指が完全に入ると、ゆっくり抜き出す、この動作を繰り返して、少し  
ずつ膣を慣らしていき、それと同時に媚薬クリームも染み込ませてい  
く。

そして慣れてきたので、中指も合わせて二本同時に、綱奈のマンコ  
に入れていく。

「あくっ、あっ、んんっ、ん」

綱奈は少しだけ顔を歪めるが、白蘭が指の抜き差しを繰り返すと、だんだんと顔が緩まる。

「少し動かすよ」

マンコに入っている指を少しだけ曲げ、まるで調べるように膣内の様々な場所を押ししたりして刺激していくと、マンコがだんだんと愛液で濡れ始める。

「なるほどね。少し速くしてみようか」

一度指を抜き出し、再び入れていき、今度は速く抜き差ししていく。それだけではなく、たまにぐつと押ししたりして、綱奈の反応を確かめる。

「あつ、んあ、ふつ、ふつ、はああ、ふあああ、んふつ、ふあつ」

「段々慣れてきたね。声に艶が出てきたよ」

「んくつ、ふあつ、ん、ん、んああつ、そこつ、あつ、あつ、あつ、きもちっ」

「ここもいいよね？」

「ふああああつ、はあつ、はあつ、すごい、そこつ、はつ、んにっ、すごいっ♥」

綱奈は白蘭によって発見されたGスポット等の性感帯を刺激され、喘ぎ声を上げていく。

未発達だった性感帯は媚薬によって活性化され、白蘭によって開発される。

段々と快楽が増していく自信の身体。

綱奈は快楽を与えてくれる白蘭に少しずつであるが好意を抱き始めていた。

こんな経験を与えてくれるのはこの人だけだ。

そんな思いも綱奈にはあつた。

「よし、ちよつと本気だそうか」

白蘭はお腹の下の部分、ちょうど膣の部分を押す。

膣内では上壁が押され、刺激しやすくなる。

「じゃあ、くぐよ」

そう言うと白蘭は二本指で、勢いよく綱奈の膣をコチュコチュコ

チユと擦り始める。

膣から訪れる快樂は一瞬で綱奈の脳内に押し寄せ、綱奈に襲いかかった。

「ひやあああああ、ああつ、あつ、ああああああああつっつっ ♡♡」

「きもちい、きもちよすぎっ ♡おまんこきもちいいいいい」

「いくうつ、もういくよお、んひっ、いくうううううう ♡♡」

本気で責める白蘭の技術は凄いもので、流石、最高峰の調教師から学んだことだけはある。

その技術に綱奈は翻弄され、足を支えに、腰をビクンと突っ張り、アクメした。

「まだだよ」

「へああつ、らめつ、いったばかりだからあ ♡だめつ、きもちいのだめえええ!!」

「ダメだよ綱奈ちゃん、嫌がっちゃ。天国見せてあげる」

白蘭は指を膣に入れた瞬間に回転させ、中を刺激していく。

グジュボグジュボと綱奈のマンコからはいやらしい音が聞こえ、綱奈は愛液を垂れ流して、本能の赴くままに腰をカクつかせ、快樂の暴力に犯される。

「またっ、んくううううう、いっくっ!!んああああああ、いくつ、いくっつっ!!」

「もうやめっ、んおおつ、おおつ、いぎゅっ!!くあああつ、んひいいいっ、へああああああ!!」

「ああつ、あああああ、これっ、吹いちやううつ、お潮吹いちやうつ ♡♡びやくらんっ、らめつ、とめへっ、へひっ、へひやああああ!!」

「でるでるでるでるっ!!出ちやうつ、んにやああつ、んおおおおおおおおっ ♡♡♡」

決して小学生が上げることのない獣の様な喘ぎ声を上げて、今までで一番高く腰を突き上げながら、綱奈が大きなアクメをした瞬間、潮が綱奈の尿道から噴水のように吹き出され、吹き出す解放感も快樂に変わり、激しくアクメし続ける。

「とめへえええ、びやく、らんっ、もうきもちいのいやっ、いやな



のおっ」

「ダメだよ。まだまだ」

白蘭は手を休めることはしなかった。

ここで綱奈に止めを刺すためだ。

アクメすることを嫌がらない、どんなにアクメしても快楽を貪り続ける。

快楽に恐怖しない、そんな存在に墮とすため。

白蘭は指を入れたまま、確実にGスポットをグイグイ押ししたり、細かい動きでコスコスと擦り、アクメへ導く。

「そこっ、だめっ、あたま、変になるっ、きもちいの、だめえ」

「うああああ、ああっ、まひゃ、いくうっ、へひっ、いくうううううう!!」

「へえあああっ、またでるっ、お潮でるっ!!」

またも体をガクガクと痙攣させながら、ぷしやああああと潮を吹き出す綱奈。

「気持ちいいんだね。また出そうでしょ?」

「んへえええ、うんっ、でるっっ、お潮でるっ、んふううううううううううっ!!」

腰をカクカクツ、カクカクツと振り、潮を吹きながら綱奈はアクメした。

そして、白蘭は指を抜きだした。

「んあああああっ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「あと少しだよ」

今度は先端が太く大きい、そこから根本までは細い、ポルチオ開発用バイブを用意した。

それをゆっくりと綱奈のマンコに挿入していくと、コツンとバイブが壁に当たった。

それは子宮口、つまりポルチオである。

「当たったのが分かるかい。これがポルチオだよ」

「うん。分かるよ」

「じゃあ、入れていくからね」

そう言つて白蘭はバイブを少し押し込み、子宮内にバイブを入れていく。

「う、はあああ、はあ、んくう、はあ」

「抜くよ」

白蘭はゆっくりと子宮からバイブを抜き出し、ポルチオを刺激する。

そして、ヌコヌコとポルチオを出たり入ったりして、ポルチオを開発していく。

媚薬のお陰で、ポルチオも子宮も感じるようになっていた。

「ふわあああつ、はひゃつ、んくつ、あはああ、んん、おつ、あつ」

ポルチオを通る前に、バイブをクルクルと回転させ、ポルチオを刺激して焦らしら後はずぼつと少し勢いをつけて突いたり、ポルチオからギリギリ抜けるか抜けないかの位置で前後させ、いきなり抜き出したり等を白蘭は繰り返していく。

「ほおおおつ、おつ、ほおおつ♥ほあああああつ、あおおおつ♥」

ポルチオは開発されれば、あり得ないくらいの快楽を生み出す。

綱奈はその快楽に翻弄されつつある。

間抜けな喘ぎ声をだし、身体をビクつかせている綱奈は小学生では経験できないことを体験している。

「いい感じに呆けていきだね。スイッチ入れよっか」

バイブの先端にあるスイッチを中間から上にいれると、バイブが振動を始める。

「うあああああつ、ポルチオがブルブルつ、刺激されてつ」

ポルチオに挿入するのポルチオ口に少し押しあて、振動をポルチオに与える。

そして挿入し、子宮に振動を与える。

「うおおおつ、おおつ、子宮が震えてつ、気持ちいいつ♥♥おくつ、おおつ、あつ」

ブルブルと震える子宮は甘い快感ではなく、底のない、深い快感を生み出している。

腰は勝手にカクカクと振り始め、子宮はキュンキュンと収縮と開放

を繰り返す。

感じている綱奈を見ながら、白蘭はスイッチを上から下に下げた。「ああああっ、くうううっ、子宮がっ、んあああっ、掻き回されるっ」子宮に入っていたバイブが振動を止め、グリーングリーンと回転し、子宮を舐めるように刺激し始めたのだ。

ゆっくりと丁寧に戻るバイブは子宮全体をかき回し、子宮をマツサージしていく。

「子宮からっ、奥からっ、くるっ、いつちやう♥ふわああっああああっつ、いつくうううううう!!」

綱奈は深いアクメをした。

激しいアクメではないが、綱奈の意思を何処かへと引っ張るような、そんなアクメだった。

気持ちよさも今まで経験したようなビリビリとしたものではなく、ズンズンとした、不思議な気持ちよさだった。

「はあああっ、またっ、んつくうううううっ♥♥んああああっ、止まらないっ、アクメ止まんないっ、んああああああああっ♥♥」子宮に合わせ、ポルチオも刺激されている。

子宮、ポルチオで発生するアクメは止まらない。

膣でのアクメや他の場所でのアクメは一度は手放されるもので、100に到達すると0になり、0からスタートする。

一方、子宮、ポルチオのアクメは手離さない。

100に到達すると70からスタートする。

真正銘の連続絶頂。

「いくううううっ、はっあああああっ♥びやく、とめっ、びやくらんっ、止めてっ、んっはっ、んきゆうううううううっ!!」

「いつ、あっ、くっ、いくっ♥んああああっ、っっ、んああっ、んくっ、ほっ、んあいくうううううっ♥♥」

「またっ、いつくうう♥もっ、はっ、へあああっ、いくっ♥うあああっ、ああああっ、おっほおおおっ♥♥」

そしてやっと、白蘭がバイブを止める。

「んあっ、ああっ、はっ、はあっ、んはっ、んんっ、ああっ」

子宮、ポルチオのアクメは細かく痙攣を続け、浅イキを繰り返している。

白蘭は綱奈が落ち着くまでの間にベッドから離れ、棚から新たな道具を取り出す。

道具は3又に別れ、各先端には吸引器と吸引器の円上的一部分に小さなローターが付いていた。

「人間にはねえ、快樂神経つてのがあるんだ。一般には知られてないけどね」

息を整えた綱奈に近づき、吸引器を綱奈の乳首、クリトリスに付けながら独り言のように白蘭は言う。

「この神経を開発することで、頭が感じる快感が減衰しなくなるんだ。簡単にいうと、経験したことのない快樂を味わうことができるよ」

吸引器をつけると道具の二つあるスイッチの内、一つを押す。

「ひゃっ」

乳首、クリトリスが吸引され、綱奈は驚きの声を上げる。

「いくよ」

白蘭がもう一つのスイッチを押すと、付いていたローターがぶぶぶぶぶと振動を始める。

「ああっ、ああっ、んんんあ、ふう、はあ、んんっ」

乳首からは甘い快感が、クリトリスからは鈍い快感が発生していた。

「やっぱりクリトリスはまだみたいだね。でもこうすれば」

白蘭は吸引するスイッチの横にある三つあるダイヤルの内、一つを回していく。

「くああっ、はああ、ふああ、ああああ、あっ、あっ」

クリトリスから生じる快感が強いものに変わっていく。

白蘭はクリトリスの吸引を強くしたのだ。

それにより、より快感が生まれやすくなり、より快樂神経が発達していく。

「普通にやるだけじゃ、快樂神経は発達しない。なるべく性感帯は多く、同時に、同じように刺激していくんだ」

「んやああっ、ふくっ、くあっ、ん、ん、あんっ、あっ」

綱奈は少しずつであるが何かが身体の奥から来ているのを感じていた。

ゾワゾワとした感覚だったり、ゾクゾクとした感覚だったり、正体は分からないが確かに感じていた。

「よし、少し強くしてみよう」

そう言って白蘭がコントローラーを操作すると、振動がヴィヴィヴィヴィヴィという少し強いものに変わっていた。

「んううう、うああっ、くううううっ、んくっ、ふああああ、や：：あああっ♥」

子宮が段々熱くなってきている。

そんな感覚を綱奈は感じていた。

そして、身体の奥から来ていた感覚はどんどん上に上がっている。

「次だよ」

振動がぶいいいいいいいいという細かく、かつ強い振動に変わった。

「くはああああああっ♥♥はあっ、はあっ、ひっん、やああっっ、んんんんっ」

綱奈の体は小刻みに震え、脚はガクガク、マンコからは愛液を駄々漏らし、シーツに大きな染みを作っていた。

そして何かは頭に上ってきていた。

子宮が熱い。

何かが弾けそう。

怖い。怖い。

綱奈は感じている快樂のその先、白蘭がいう未知の快樂を感じるのが怖くなっていた。

未知故の恐怖を感じているのだ。

さつきですら、凄かったのにその先なんて。

私、どうなっちゃうの。

そんな思いの中に、微かな期待もあった。

もつと気持ちよくなりたい。

もつと気持ちよくして。

もつと、もつと、もつと、もつと!!

その思いは恐怖を押し潰すように次第に大きくなっていき、何時しか綱奈の頭の中を支配していた。

白蘭が綱奈の顔を見ると、綱奈の顔は快楽を欲しがる雌の顔になっていた。

目をとろんとさせ、口は半開きで、荒い息遣いをしている。

「うん、いい顔だ。準備は万端みたいだね。さあ、堕として上げよう」

「へひいいい、堕ち、堕ちる?」

「うん。綱奈ちゃん、君はね。快楽を貪るだけの、そんな存在に堕ちるんだよ」

「堕ちたいい、はっんあ、もつとアクメしたいい。だから・・・ね。白蘭、堕として」

「どうしようかなあ」

「うあああつ、何でつ、堕としてよつ、もつと気持ちよくしてよお」

「じゃあ、僕のこと好き?いや、愛してる?」

「うんつ、愛してるつ、好き好きつ。白蘭カッコいいし、私に幸せを教えてくださいだから、好き」

「僕の命令は何でも聞ける?人を裏切ったり、殺したり」

「つくああつ、んんつ、聞くよつ、人も殺せるつ、お母さんにも嘘つけるし、白蘭の言うこと聞くからあ、お願いつ、いかせてええつ!!!」

「そこまで言うなら。じゃあ、キスしようか」

「うくんっ!」

綱奈は口をすぼませ、白蘭にキスをせがみ、白蘭は綱奈にキスをす  
る。

ただのキスではない。

デーブキスだ。

白蘭は綱奈の口の中に、舌を入れ、口内を蹂躪する。

「んちゃ、んふうつ、ふつ、んふつ、ふはっ、ふうう、ふはあ。きもひい

♥こんなチューはじめへっ」









## 洗脳しようか (洗脳)

白蘭の家の地下二階。

そこには怪しげな白い機械が沢山あった。

例えば2 m程の高さがある機械の柱。

拘束具が付いた機械の椅子。

人一人入りそうな機械の棺。

これらは全て白蘭が科学者達に作らせた洗脳装置だ。

その中で機械の柱に二人の少女が拘束されていた。

一人は笹川 京子。

もう一人は三浦 ハルだ。

二人は柱の正面に拘束されており、両手両足を柱の中に入れる穴に入れられていた。

意識は薬で奪われており、顔を下に向け、うつすらと開いている目は虚ろである。

さらに二人は裸で、乳首やクリトリスには柱から伸びている注射針がささり、マンコ、アナルにはバイブが突っ込まれており、お腹や成長していない胸、子宮のちようど真上に電極パッドが貼ってあった。

「よくやったね、綱奈ちゃん」

「えへへ」

綱奈は白蘭に頭を撫でられ、可愛い笑顔を見せ、手に持っていた二枚の写真を白蘭に返した。

一枚目の写真には京子が写っていた。

穏やかな優しそうな瞳に朗らかな笑顔、肩にギリギリ届きそうな外ハネの茶髪が特徴的な少女だ。

二枚目にはハルが写っていた。

パツチリとした大きな瞳に元氣ハツラツな笑顔、セミロングの黒髪を後ろで一つに纏めているのが特徴的だ。

京子、ハルを拐ったのは白蘭に命令された綱奈だ。

綱奈は白蘭の命令通りに動き、まだ知りもしない自分と同じ年の少女を何の躊躇いもなく気絶させた。

「これから何するの？」

「この二人を洗脳して、綱奈ちゃんの部下にするんだよ」

「仲間？」

「そうだよ。僕のために働く綱奈ちゃんの言うことを聞く。まあ、友達かな」

「わー！ありがとう、白蘭」

この二人を仲間にすることを白蘭は考えていなかったが、綱奈の部下にするという考えを思いつき、時間を掛けるのも勿体無いので手っ取り早く洗脳することに決めたのだ。

「うくん。でも、作ったやつが超のつく変態だからねえ。裸にしないと使えないし、色々変な言葉も教え込んだじゃうんだよねえ」

「それでもいいよつ。白蘭のために二人を上手く使って見せるから」  
「それなら安心かな」

綱奈と白蘭は機械を操作する端末の元へ行き、機械を作動させる。

「起動します。・・・第一段階、肉体改造を開始します」

すると機械が作動し、機械音声が流れ始め、乳首とクリトリスに刺さってる注射針から媚薬が投与され、マンコとアナルに突っ込んであるバイブが軽く振動を始める。

さらに貼つてある電極パッドも刺激を開始し、太ももやお腹、胸が僅かに震え始める。

投与される媚薬は綱奈の使った媚薬の数倍の効果があり、それはバイブからも滲み出ており、さらに電極パッドは肉体を活性化させ、快楽神経を太く大きくしていく。

「うああつ、ああああつ、はあつ、ああつ、ああああ、あつあつあつあつ、あああつ」

「ひいつ、ひつ、あつ、あつ、くうつあつ、うああつ、あああつ、ああああつ、あつあつあつ、あつ」

二人はバイブによる媚薬によって改造されたマンコとアナルからの快感で、無意識の内に喘ぎ声を上げてる。

すでに二人のマンコからは愛液が滴り、バイブを伝って地面に滴を落としてる。

電極パッドから与えられる電気は快楽神経を成長させるだけでなく、刺激する役割も持ち、太ももという普通の人なら性感帯にはなり得ない場所で強い快楽を受けるようになり、子宮にも電気走り快楽を生み出している。

「あつ、ああつあああ、あんつあつあつ♥うああああつ、はあつ、はあつあああつ♥♥」

「あはっあはっあはあああつ♥あつひっ、ひっはっはっはっ、あつあつあああつ♥♥」

声に段々艶が混じり始め、首も小刻みに上下させ、口から涎をポタポタ垂れ流している。

電極を入れられたカエルのように身体全体をビクビク、ガクガクと痙攣させ、京子とハルはアクメを繰り返す。

バイブはポルチオを通り抜け子宮までも犯し、振動は子宮を揺らし、ポルチオ、Gスポットを刺激し、二人の身体をいやらしく改造していく。

「んあああああつあああああつ♥ああああああああ♥♥はあつくっ、くああああああああ♥♥」

「ひっひいひいひいひいっ♥へあああああつ、へあつ♥はあああつあああああああ♥♥うあああああつ」

京子の深く優しい声とハルの元気らしい声。

その両者の喘ぎ声は艶やかでいやらしい。

時には腰を突き出したり、上下にへこへこと振ったり、脚をカクカク開いたり閉じたりさせながら、二人は快楽で頭をメチャクチャにされている。

時おり顔をあげては、その虚ろな眼を見開いたり、蕩けさせたり、口をへの字にしたり、あの字にしたりしている。

そんないやらしい二人を見ている綱奈は段々と身体が火照り始め、無意識に手をパンツの中に突っ込み、クリトリスを弄りオナニーをしていた。

「二人とも気持ちよさそお」

「そうだねえ。でも、綱奈ちゃんにはしないよ。廃人になっちゃうか

もしれないから」

「廃人？」

「そうだよ。最悪壊れちゃうから」

「じゃあ、我慢する」

「うん。それがいいよ」

二人が話している間にも肉体改造は進んでいく。

乳首とクリトリスから注入される媚薬は全身に回り、全身を媚肉へと昇華していき、頬はほんのりと赤くなり、吐息には湿っぽさが混じり、明らかに雌の喘ぎ声を上げている。

愛液でヌラヌラと光を反射しているバイブは振動をより激しく、より細かくしていく。

乳首とクリトリスはビンビンに勃起し、小学生とは思えない程いやらしい。

「んうううううつつ、あつ、はあつ、おはあああああつつ♡♡♡お  
おおおおおおつ♡ほおつ、おほおおおおおおお♡♡」

「おおおおおおつ♡んはあああつ、んああつ、は  
ひひひひひひ♡♡ほおおおおおおおおおつ、お  
おおおおおお♡♡」

プシュツ、プシュツと潮を断続的に吹く度に腰を突っぱね、卑猥なダンスを披露している。

マンコのバイブはポルチオから子宮の部分だけがピストンを始め、子宮を突き上げ激しい快楽を二人に与えており、アナルのバイブは振動に加え、小さな突起も出現し、回転も始めアナルの肉をかき回し、振動だけでない快楽を与える。

「連続アクメを開始します」

そんな機械音声が聞こえた。

今まで京子とハルは確かにアクメをしていたがそれは断続的なもの。

これからが本当の連続アクメだ。

収まることのない最高の快楽。

小学生で知ることができるのは不幸か、はたまた幸せか。











その行為さえも快樂になり、二人は腰をブルブルと震わせている。「終わったみたいだね。説明書によると来年と再来年にもう一回やるとどんなことをしても解除できない洗脳が完了するらしいね」

「いいなあ。本当に気持ち良さそうだもん」

「今度僕が変わりに与えてあげるよ。さっ、確認しよう」

眼は虚ろを通り越してなにも写しておらず、何処かニヘラと笑っている二人に白蘭は問いかける。

「やあ、二人とも僕が分かるかい」

「びゃ、びゃくらん、しゃま、です」

「うん、その通りだよ。二人にとって僕はどんな存在だい？」

「わらひ、たちの、ごひゅじん、ひゃま、です」

「うん、正解だよ。どうやら洗脳は完璧みたいだね。いいかい。これから京子ちゃんとハルちゃんは綱奈ちゃんの部下だ。彼女の言うことは何でも聞くんだよ」

「はひいい、わかり、ました。白蘭様」

そして白蘭は綱奈に語りかける。

「今日から二人は君の部下だよ。上手く使ったあげるんだよ」

「うん」

「それから綱奈ちゃんに戦闘訓練も積ませなくっちゃ」

「白蘭のために戦えるってこと？」

「そうだよ」

「私死ぬ気で頑張るよっ」

死ぬ気。

その言葉を聞いて白蘭は心を踊らせた。

（やっぱり素質があるよ。さすがボンゴレ直系の血が流れていることだけはあるかな）

「うん、僕も頑張つて綱奈ちゃんを育てるよ」

そして京子とハルの拘束を解き、綱奈にお風呂に入れさせた。

その後、二人にこれからの振る舞いを説明した。

「君たちは今まで通りの生活をするんだ。連絡がある時は呼ぶからね。あと君たちにも訓練を受けてもらうからね」

「はい。了解しました。白蘭様」

「外ではお兄さんって呼んでね」

白蘭は3人を帰宅させ、今度は綱奈にSEXをしようと考えていた。

「愛の楔を打ち込まなくっちゃねえ」

マシユマロを食べながら白蘭はそう呟いた。

## 依存させよっか その1 (乳首責め)

あれから三年が経った。

綱奈の元にはリボンが家庭教師として現れ、居候している。

「ちやおっス、オレは家庭教師のリボン」

そうやって現れたリボンは綱奈の自室で本当の目的を言う。

「オレの本当の仕事はお前をファイアのボスにすることだ」

その言葉を聞き、綱奈は驚き、何を言っているんだと思った。

と、いうことはなく、綱奈は白蘭に全てを聞いているのだ。

これから自分が何に巻き込まれて、どういった道を歩んでいくのかを。

「僕のために強くなってね、綱奈ちゃん」

「うん。死ぬ気で白蘭のために強くなる」

そうして獄寺、山本、ビアンキ、ランボ、イーピン、雲雀、了平に出会い、ハチャメチャな生活を送っていった。

勿論、京子とハルも初対面のふりをして、親交を深めている。

そしている内に黒曜襲撃事件が発生する。

綱奈はリボンと共に首謀者である骸を無事倒し、平和が訪れたと思ったら、次はリング争奪戦が起こった。

ボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアーとのリング争奪戦の霧の守護者戦。

霧の守護者として骸の代わりにクローム髑髏という、どこか蠱惑的な少女が現れる。

クロームはヴァリアーの霧の守護者であり、アルコバレーノの一人であるバイパー、今はマーモンと名乗っている、と戦い負けそうになるが、そこに骸が憑依し、マーモンを撃破。

この話はクロームが霧の守護者戦が終わった次の日、病院から帰る時から始まる。

守護者戦が終わった後気絶したクロームが犬と千種に置いていかれ、病院から出ようとしたとき、丁度出入口に綱奈が来ていた。

「ボス？」

「あ、クローム」

クロームの目の前には、ニコリと包容力があり、まるで大空のような笑顔を浮かべた綱奈がいた。

綱奈はもう中学生だ。

ツンツンとしている癖っ毛はそのままだが、腰の中ほどまで届く長さまで髪は伸びていた。

そして顔も幼さを残しつつ、確実に美女の道を上っていた。

学校ではドジっ子として通っているが、それは演技であり、白蘭の教育により身体能力は高い。

「何か用？」

「うん。ちよつと来て欲しい場所があるんだ」

クロームは何か嫌な予感を感じた。

なぜそう感じたのかは分からない。

目の前にいるのはボスなのに。

「・・・私、犬と千種の所に帰らないと」

「すぐ終わるから。ねっ、お願い」

「・・・分かった」

綱奈の真っ直ぐな瞳にクロームは折れ、綱奈についていくことにした。

「どこに行くの」

「もうすぐだよ」

そう言つて綱奈はどんどん進んでいく。

そして、高い塀に囲まれた道で綱奈は立ち止まった。

「連れてきたよ、白蘭」

「お疲れ、綱奈ちゃん」

「誰？」

綱奈達が来た反対側から白蘭がやって来る。

クロームは初めて見る白蘭の姿に警戒心を強くした。

「やあ、初めまして、クロームちゃん。僕の名前は白蘭。綱奈ちゃんの友達だよ」

「近付かないでっ！」

白蘭の雰囲気、クロームの直感が白蘭を近付かせてはいけないという判断をした。

クロームはジリジリと後ずさるが……。

「痛っ！」

「クローム、どこに行こうとしてるの？」

クロームの腕を綱奈が掴み、その力強さにクロームは声をあげる。

「ハハッ、クロームちゃん。これから僕の家に行こう」

「嫌っ！ボスっ、離してっ！」

「もう、抵抗しないでよ、クローム。白蘭、骸とのリンク切っちゃおうよ」

「うん。そうだね」

パンツと白蘭が拍手をすると、クロームが苦しみだし、倒れた。

「うっ……がはっ、うう……」

クロームの腹部がへこんでいた。

クロームの内蔵は事故で失っており、それを骸が幻覚で補っていた。

しかし、白蘭はクロームと骸のリンクを切る空間を作り出したことで二人のリンクが消え、骸が幻術で補っているクロームの内臓が消えたのだ。

復讐者の牢獄にいる骸はそのことを感知したが、霧の守護者戦で力を使ってしまったため、外部に連絡を取ることができずにいた。

「さあ、行こうか」

白蘭は苦しむクロームを担いで、家に向かった。

白蘭の家に着くとクロームはあまりの痛みで気絶しており、白蘭の家に入るとクロームのへこんでいた腹部が元に戻った。

どうやら白蘭の家にはクロームのために、幻覚で内蔵を補うような空間が作ってあるらしい。

「骸君とのリンクも切れたし、これでクロームちゃん的位置は特定で

きないね」

白蘭はにこやかにそう言った。

「私も調教に参加してもいいよね」

「もちろん♪」

綱奈とクロームを抱えた白蘭は地下へと向かった。

「う・・・ああ・・・。ここは？」

クロームが目を覚ました。

彼女はベッドの上に仰向けの状態で、手と足はベッドの上部と下部から延びる鎖に拘束され、黒曜の制服も下着もすべて取り払われていた。

クロームの産毛すら生えていない脇、形の整った僅かな膨らみのある乳房、綺麗な薄ピンク色の乳首、毛の生えていないマンコに、柔らかそうな太股、スルリとした足。

その全てが露わになっている。

「目が覚めた？クローム？」

「ボス。・・・骸様を感じない。ここはどこなの？」

クロームの顔を見つめていた綱奈が目覚めたクロームに声をかけ、クロームは不安そうな瞳を綱奈に向けていた。

それは骸に綱奈が何かをしたかもしれない。

その恐怖をクロームは感じていた。

「骸には何もしていないよ。ただクロームを骸との繋がりを切っているだけだから安心して。君の内臓のこともね」

「そう」

クロームは明らかにほっとし、息を吐く。

「どうして私は裸なの。服を返して、ボス」

「それはできないよ。これからクロームを調教するんだから。裸じゃないと」

「・・・調教？」

「ちよつと体を触るだけだよ」

そう言つて微笑む綱奈の顔を見たクロームは、その微笑みに安心感を覚えた。

流石、大空属性を持つ綱奈の全てを包み込む微笑みだ。

その微笑みだけでクロームの不安は和らげられた。

「調教が終わった頃には骸のことなんかすっかり忘れて白蘭の虜になつてるよ」

「そんなことない。私は・・・どんなことをされても骸様のモノ。骸様を忘れるなんて絶対はない」

「ふふつ。そつか。その言葉忘れちゃだめだよ」

綱奈はクロームの腰に乗り、馬乗り状態になる。

そしてゆつくりとクロームの体の上に横たわり、クロームにキスをする。

「んんっ！」

綱奈はそのまま舌を入れ、無理やりクロームの舌と絡ませ、貪るようにキスをする。

「んふう、じゅむう、んふう、ふあ、ふう、ん、んん」

「んく、んく、んく、あはああ、クロームの唾液おいしい、ん」

綱奈とクロームの舌はいやらしく絡み合い、クロームは綱奈のなすが儘、綱奈はクロームの口内を蹂躪し、味わっている。

「んふあ、んんんっ、んんっ、んんんんっ、んはあ、はあ、んふう、うう、ああ」

「ふんあ、んん、はあ、眼が蕩けてきてる。んんん、んふあ、気持ちいいんだね、クローム」

そして綱奈はクロームの口から離れ、体を上げる。

「はあ、はあ、はあ」

「顔が赤くなってるよ。可愛い可愛い」

クロームは息を少し荒くさせ、口を半開きの状態で呆然と綱奈の顔を見ている。

「さてと、次は胸と乳首かな」

綱奈は腰から少し位置を下げ、太股の位置に移動し、ムニムニとクロームの柔らかい乳房を揉む。



「ひっ、ボ、ボス。あっ、くっ」

「優しく、優しく、ほぐしていくからね」

綱奈は手のひらで軽く乳房を潰して、乳房を回転させるように揉んだり、ぷにぷにと指を使い、優しく揉む。

そしてある程度ほぐれたと判断すると、ベッドの直ぐ傍にある様々な道具が置いてある台から錠剤が入った瓶を手に取り、瓶の蓋を外し、三つほど錠剤を口に含む。

舌を動かして、溶けた錠剤と唾液を混ぜさせ、油断しているクロームにキスをし、唾液を流し込む。

「んっ！んふう、んん、んん」

クロームは最初は抵抗するが、ついには綱奈の唾液を飲み込んでしまう。

綱奈が唇を話すと銀糸が線を引く。

「んふあ、はあ。・・・何を私に飲ませたの、ボス」

「んん。気持ちよくなる薬かなあ。でも麻薬とかじゃないから安心して」

綱奈がクロームに飲ませたのは媚薬。

時間がない調教の際に使われる即効性の物だ。

含む錠剤が多いほど効果が強く、三錠は割と多いほうで、飲ませてから一分ほどでクロームの体に変化が起きる。

「はあ、はあ、はあ」

特に何もしていないのに、クロームは湿りを含んだ息を吐き、頬は紅潮し、ほんのりとした火照りが全身を支配し始める。

弄られる乳房がなんとも言えない感覚を生み出し、何故か下半身、特に性器周辺が疼く。

「効いてきたね。次は乳首を責めてみようかな」

綱奈はクロームの乳房を揉むのを止めて、両手の人差し指でクロームのピンク色の小さな乳輪をクルリクルリとなぞる。

「あっ、んあ、ん、ふあ、んん」

（なっ、何っ？胸がピリピリして・・・）

「ほーら。ちよつと外周をなぞって、つと。乳輪をまたなぞる」

「ん、あ、ん、く、んああああ♥」

「クローム。可愛い。本当にいい声で啼くね。これなら白蘭も満足するかも」

綱奈の焦らしは15分ほど続いた。

クロームはどんだん、どんだん何かが大きくなっているのに気付いていた。

しかし、それが何なのかが分からない。

ただ胸が、胸の突起部分が疼いているのには気づいている。

「そろそろかな」

綱奈は乳輪をなぞっている最中にすつと乳首を擦った。

「ひああっ♥」

ビリツツと甘い電撃のようなものがクロームの胸、乳首から生じた。

その初めての感覚にクロームは可愛い悲鳴を上げる。

「ふふっ。ほらっ。もっと行くよ」

「ん、ん、あっ、ひっ、あっ、んあっ♥」

「感じるよねクローム」

「あっ♥はっ、な、何を、あああ」

「今感じてる感覚だよ。その感覚を感じるって事。気持ちいいってこと」

「気持ちいい。ふっ、あ、こ、れが」

（この感覚が気持ちいい。でも・・・骸様が傍にいる時とは違う）

気持ちいい。

クロームにとっては骸が、犬が、千草がいる時が気持ちいい時間、気持ちのいい感覚を感じていた。

それしか知らなかった。

今、綱奈の手によって新しい、淫らな、感覚をクロームは教え込まれている。

「ほら、乳首が気持ちいい、気持ちいい」

「ん、ひ、ひあ♥あ、はっ、あっ」

「乳首気持ちいい、気持ちいい」

「は、あつ♥あああ、んああ♥あつ、ひい」

綱奈は何度も何度も乳首気持ちいいと唱えながら、度々乳首を擦っていたのを、乳首を人差し指でクリクリと弄る動作に変え、クロームに快楽を教えこんでいく。

「クロームも言ってみて。乳首気持ちいいって」

「んあ、あつ、ちくびって、ん、ん、何？」

「今私が触っている所だよ」

(胸の突起。乳首って言うんだ)

知らない感覚に翻弄され、思考が麻痺し始めているクロームの思考に綱奈の言葉が染み込んでいく。

「乳首気持ちいい。乳首気持ちいい」

「はっ、あああ♥ち、くび、あ、きもち、いい」

「そうそう。乳首気持ちいい。乳首気持ちいい」

「はあつ、あつ、気持ちっ、いいっ。ひあ♥あ、ひい、ちくびっ、きもちっ、いい」

「偉い、偉い。偉いよ、クローム。その調子」

「ん、は、あ、ああ♥ボ、ス。ちくび、気持ちいい、はっ、ああ、あつ」

「おまんこも濡れてきてるね。媚薬の力もあるし、乳首イキしてみようか」

綱奈がクロームの下腹部に目を向けるとクロームの無垢なマンコからは愛液が漏れだし、トロトロとした透明な愛液はベッドのシーツに作り出していた。

そして綱奈はクリクリと弄る動きを止め、親指と人差し指でクロームの乳首を優しく挟み、キュ、キュと優しく摘まむ。

「ふああつ♥ああつ、あああつ♥」

乳首を摘ままれて生じた快楽はクロームの脳に強い電撃を与え、さつきよりも大きな声でクロームは声を上げた。

「きゅ、きゅ、きゅうう。きゅ、きゅ、きゅうう。どう、クローム。気持ちいい?」

「はあつ、ああ、あつ、気持ちっ、いいっ。頭、痺れ、るっ、はっ、あああつ♥♥」



樂がクロームの身体を支配した。

その瞬間にビクツとクロームの身体が大きく痙攣し、腰は軽く浮き上がり。マンコからプシュツと僅かに潮を吹いた。

「凄い、クローム。乳首イキで潮吹くなんて」

「はっあああ、ああああ、いやあ、ボス、私・・・」

「ふふっ。そう恥ずかしがらないで。これは仕方ないんだよ。素質あるよクロームは」

綱奈はよしよしとクロームの藍色の髪を撫でる。

「じゃあ、後二、三回、乳首でイッてみようか」

「ボスっダメっ。まだ痺れが・・・」

「これは調教なんだから。クロームに乳首の気持ちよさ、いや、イク事の、女の本能を教えてあげる」

そうしてクロームは綱奈の手によってアクメさせられる事になる。

それが終わるころにはクロームは息絶え絶えの状態だった。

休みなしにアクメしたのだから当然だろう。

「はあ、はあ、はあ、も、う、ダ・・・メ」

「あれ？気絶しちゃった」

クロームが連続アクメに耐え切れず気絶すると部屋に白蘭が入ってきた。

「あー、クロームちゃん気絶してる。やりすぎだよ綱奈ちゃん」

「ごめんなさい、白蘭。つい楽しくなっちゃって」

「クロームちゃんから骸君への依存先を、快樂で僕に変えるんだから仕方ないといえれば仕方ないけどね」

そう言つて白蘭は気絶しているクロームに近づく。

「ちよつと起きてくれるかな」

白蘭はクロームの身体を起こし、肩を揺らして、少しだけ意識を回復させる。

「ん・・・あ・・・」

クロームの朦朧とした瞳が白蘭に向けられる。

「今日はここまでだ。暗示をかけて返すよ」

白蘭は薄っすらと開いているクロームの瞼を指で無理やり明け、ク

ロームの朦朧とした瞳の視線を自分の瞳と合わせる。

すると白蘭の瞳が怪しく光り、クロームの瞳に光が入り込んでいるように見える。

「あ……あ……」

「君はこの出来事を忘れる。綺麗さっぱりね。でもこの部屋に入ると思いたすことができる。それから綱奈ちゃんに”人形”と言われるば、君は綱奈ちゃんの言うことは絶対に聞くようになる。いいかい？」

「う……あ……い……や……」

無意識ながらクロームは白蘭の暗示を拒否する。

「うくん。流石骸君の憑依先だね。もつと強めないと」

白蘭がそう言うのと瞳の光がより一層強くなる。

「あ……ああ……ああああ……ああああ……」

いつの間にクロームの両目は見開かれ、僅かに口を開き、魅入るように白蘭の瞳を、光を見つめる。

そうして白蘭の強力な暗示はクロームの心に確実に刻み込まれていく。

骸への思いで必死に手こうしていたクロームは、ついにはクロームは白蘭の暗示に耐え切れず、身体をガクガクと痙攣させ、シヨワアアアと尿を漏らしてしまう。

「あ……あ……あ……」

光が収まった後もクロームは顔を上げたまま、虚ろな瞳で何も無い虚空を見つめていた。

「これで完璧だ。骸君にも分からないようにしたからね」

「大丈夫なの？白蘭。クローム、壊してないよね」

「大丈夫だよ。今はあんな感じだけど意思が覚醒したら元通りさ」

白蘭と綱奈は調教の後始末をして、クロームに服を着せる。

「少しずつ、君の心を変えてあげるよ」

「ん・・・はっ。ここ・・・は」

「大丈夫？クローム？」

「ボ・・・ス」

今二人いる場所は公園で綱奈はベンチに座っていた。

クロームはというと、綱奈に膝枕されていた。

（え？何で私・・・ボスに膝枕されて・・・）

「急に倒れたからびっくりしたよ。貧血？それとも争奪戦の疲れかな。まあ、ともあれ目が覚めて良かった」

「私・・・倒れたの？」

「そうだよ。大丈夫？」

綱奈の心配している顔がクロームに映る。

その顔を見ると頭のどこかでチリチリとした感覚をクロームは感じたが、すぐにどこかへと消えていった。

「もう・・・大丈夫。ありがとう、ボス」

クロームはそう言って立ち上がる。

「ふらつきはなそうだし、大丈夫だね。一人で帰れる？」

「うん」

「そっか。じゃあねクローム。身体に気をつけてね」

そう言っつて綱奈は公園を去り、クロームも公園を出て、黒曜へと帰っていった。

何故か、クロームのパンツは濡れていた。